佳作（低学年の部）

おじいさんからの電話

京都府　ノートルダム学院小学校　三年
判治（はんじ）　慶祐（けいすけ）

トゥルル、トゥルル。電話が鳴ります。番号を見ればわかります。ぼくのおじいさんからです。

「もしもし、けいすけか？」「はい。」

「元気か？」「はい。」「今ど、いつ来るの？」

「まだ決まってないよ。」「えー？はよ来い。さみしいがゃー。」

前回行ったのは、ほんの一週間前です。

「もう会いたくなったのかなぁ。」と、ぼくは思います。ぼくが住んでいるのは京都市で、おじいさんは名古屋市に住んでいるのです。ぼくはあわててカレンダーを見ます。

「えっと、今週末は空手の試合があるから行けないし、来週は漢検があるし、その次の週に行きます！」「もっと早くこやー。」

「んーっと、じゃあ漢検終わってから行きます。」「ん。分かった。楽しみに待ってるからね。」「はい！」

ガチャン。こんな感じで、しょっちゅう電話がかかってくるのです。

ぼくのおじいさんは七十五才になりますが、とても元気です。ご飯なんて山ほど食べます。白米が大好きで、食べるときにはかならず、

「このお米の一粒一粒はな、お百しょうさんたちが汗水流して作ってくれたんだぞ。のこすなよ。」と言います。ぼくは、お茶わんにくっついたご飯を一粒残らずおはしでこすりとるのにひっしになります。さい後にお茶をかけてし上げるとピカピカになります。「えらいぞ。」おじいさんはほめてくれます。そんなおじいさんのお茶わんも、ぼくのに負けないぐらいピカピカです。「洗うの楽だわ。」おばあさんは笑います。

おじいさんは、とても物知りです。歴史、政治、芸術のことなど、何でもよく知っています。ぼくもおじいさんにしつ問したり、自分の知っていることを話したりします。歴史については、ぼくの方がよく知っていて上回ることもあります。そんな時、おじいさんは、「おお。そうか。よく知ってるな。かしこいな。」と、うれしそうにほめてくれます。

そんなおじいさんですが、とてもきびしい時があります。それは、おまいりの時です。おじいさんは、お仏だんと神だなをとても大切にします。ぼくたちまごにも、すごくきびしいです。

ぼくは、そんなおじいさんのことが大好きです。だから、実はぼくの方こそすぐに会いたくなるのです。おじいさんからの電話はぼくを元気にしてくれます。電話がないとさびしいです。電話をちらりと横目で見たりします。そんな時は、ぼくの方からかけるのです。おじいさんの声を聞くと、元気になります。まるでま法のようです。

トゥルル、トゥルル。

また電話が鳴りました。京都に帰ってきてから三日目です。さい短記ろくこう新中です。